

「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の 学習成果：オーストラリア研修の事例より

Learning outcome assessment of a short-term study abroad program focusing on the development of intercultural competence: Qualitative case-study of Australian program

秋庭 裕子

要旨

本稿では、短期海外研修（オーストラリア）に参加した学生が、研修の目的である「国境をまたぐ能力」を習得しているのかを検証するため、「国境をまたぐ能力」のキーワードを過去の資料から抽出し、Deardorff（2006）が提唱する異文化間適応能力モデルを使って、学生のリフレクション・ペーパーを中心に分析した。その結果、課外活動や現地での聞き取り調査、ホームステイなど多文化社会を体感できる研修内容によって、学生たちはこの能力を確実に学んでおり、研修の目的に沿った学習成果が出ていることが分かった。また、学生がこれをきっかけに長期留学の準備をするには、研修終了後も長期にわたり留学相談のサポートをする必要性も浮かび上がった。

キーワード：短期海外研修、リフレクション・ペーパー、学習成果、仕掛けづくり

1. はじめに

日本人学生の間で、海外留学を志す学生が減っていると言われて久しい。IIE（2011）によると、アメリカへの日本人留学生数は21,290人で、前年比14.3%と減少傾向にある。日本政府としても、「留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）」を通じて、3か月未満の研修に対しても奨学金を給付し、日本人学生の短期海外派遣を支援する動きを見せている。

短期海外研修¹は、期間こそ短いものの、長期の海外留学と比べた費用面での負担の少なさ、学位プログラムの妨げにならない、卒業が遅れることもないという理由から、今後も多様な学生のニーズに応じて増え、参加学生数も増えていることが指摘されている（Chieffo & Griffiths, 2009；Deardorff, 2009；Donnelly-Smith, 2009）。日本学生支援機構による調査（2011）によると、学生交流協定等に基づいて派遣された日本人学生数は、短期を3か月未満とした場合、全体の約56.5%を占めている。

しかしながら、短期海外研修に関する研究そのものは、その現象自体が比較的新しいため、限られている（Deardorff, 2009；Donnelly-Smith, 2009；Jackson, 2006）。そん

¹ 短期海外研修の期間については、1週間から3か月程度まで多岐にわたり、それを実施する機関によって異なっているため、公式な定義はない（Donnelly-Smith, 2009；工藤, 2011）。

ななか、海外留学の研究では、近年、海外留学の学習効果の評価が注目されている。例えば、グローバル人材の育成と日本でしばし使われるように、アメリカにおける海外留学の学習成果として、異文化適応能力 (intercultural competence)、グローバルな視点と態度の習得 (global engagement, global competence) といった用語が頻繁に用いられており、いかにこれらを測定するのかが最近では議論されている。しかし、その用語の定義が曖昧であるため、プログラムの目的に合った形でこれらの用語を再定義し、その教育的成果を測定していくのが課題となっている (Deardorff, 2009)。

短期海外研修の学習効果に関しては、長期留学に比べてあまり効果がないのではないかとという考えから、あまり取り上げられてこなかった (Brooking, 2010; Chieffo & Griffiths, 2004)。そんななか、Paige 他 (2009) は、海外留学の期間とグローバルな視点の習得の関連については、あまり差がないという研究結果を発表した。別の研究では、海外留学において成功の鍵となるのは、長さではなく、参加学生の学習成果につながる研修の参加目的の設定と事前・事後のオリエンテーションの仕掛けづくりであるとも指摘されている (Chieffo & Griffiths, 2009)。これについては、工藤 (2011) も、短期海外研修における重要な要素のひとつに、学生の経験自体ではなく、自分と他者を意識した中で経験を分析し、行動する力を伸ばす「仕掛けづくり」をプログラム担当者が担う必要性を提言している。

そこで、本稿では、短期海外研修前後のオリエンテーション、現地での異文化体験型の研修という「仕掛けづくり」をすることで、どれだけ学生の教育的効果が出たのかを学生のリフレクション・ペーパーを参考にケース・スタディとして取り上げる。短期海外研修については、教育活動としての研修の効果に焦点を絞った事例研究は多々あるが (工藤, 2011)、本稿では、大学のプログラムとして位置づけられている短期海外研修の学習効果を、研修の目的と照らし合わせながら、学生のリフレクション・ペーパーから考察し、学生にとって有益な短期海外研修の構築・意義について考えてみたい。

2. 事例研究対象となる短期海外研修の特徴

本稿では、2010 年度春季 (2011 年 2 月 27 日～3 月 26 日) にオーストラリアの大学付属の語学センターにおいて実施された短期海外研修に参加した学生を対象にしている。本研修は、2010 年度で 6 回目の実施となり、現地スタッフの協力のもと、事前に現地プログラムの内容について話し合いを行っている。本研修は、春休み期間の 4 週間、オーストラリアで多文化社会を肌で感じながら、「国境をまたぐ能力の育成」を目的とし、日本の他大学の学生とのコンソーシアム・プログラムでありながら、ホームステイ、現地の学校訪問等を通じて多文化社会を肌で感じられるよう研修内容が組まれている。

現地での研修を前に、研修参加者にはオリエンテーションが 1 学期間を通じて組まれている。研修の目的である「国境をまたぐ能力」を体得するために、2010 年度の渡航前オリ

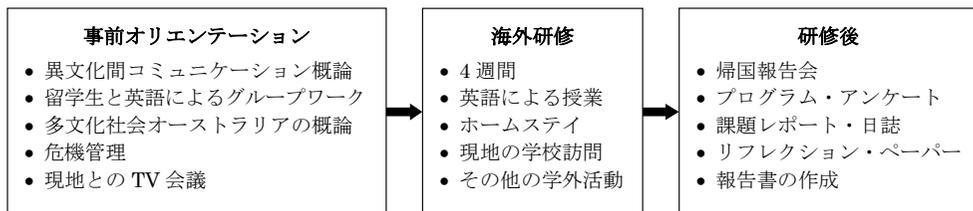
「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の
学習成果：オーストラリア研修の事例より

エンターションでは、異文化間コミュニケーション、オーストラリアの多文化社会の概論、危機管理といった基礎的な内容から、外国人留学生4名（ドイツ、フランス、ロシア、パキスタン）を招いて英語による小グループによるディスカッションを実施し、現地関係者との英語によるテレビ会議も盛り込まれ、英語による体験学習を実践する時間も設けた。

帰国してからの流れとしては、帰国後1週間以内に帰国報告会を開催し、現地研修内容の評価と振り返りを行っただけでなく、学内の派遣留学制度、その他の短期海外研修、チューター制度、寮のレジデンシャル・アシスタントなど学内での国際交流活動を紹介し、学生が海外での短期滞在経験を今後も活用できるように情報を提供した。

この帰国報告会以外に、帰国後4週間以内に各自の課題レポートと日誌、リフレクション・ペーパーの3種類を提出し、課題レポートと日誌をもとに研修報告書を作成した。課題レポートは現地での生活のなかから各自テーマを選び、それに沿って現地で発表し提出したものを、課題レポートとして提出した。

図1 短期海外研修の流れ



3. 調査方法

3.1 調査対象者

2010年度春季短期海外研修（オーストラリア）に参加した学生18名（男性9名、女性9名）を対象とし（表1参照）、海外研修参加前後に実施された自己評価シート、リフレクション・ペーパーより、学生の学びの過程の分析を試みた。リフレクション・ペーパーは、①研修を通じて学んだことのなかで特に印象に残ったこと・出来事を具体的に書き、またどうして印象に残ったか、②研修中の経験を振り返り、今後にどう生かしていきたいか、の2点を中心にA4・2枚に記述し、電子メールで担当教員に提出をした。また、本研修が学生の長期留学への意思決定に影響を与えるか否かを検証するために、研修直前・直後に自己評価アンケートを実施した。

表1 短期海外研修参加者18名の属性

属性	性別		学年				海外渡航歴	
	男	女	1	2	3	4	有	無
人数	9名	9名	13名	4名	—	1名	15名	3名

3.2 分析の枠組み: 学生のリフレクション・ペーパーから見た「国境をまたぐ能力の育成」の再考

本研修は2005年度に開始された当初から、その目的として「アウェイで活躍できる能力」、「国境をまたぐ能力」の育成を掲げてきた。2005年度同短期海外研修報告書によると、この研修がホームステイや校外学習を通じて「海外で実際に異文化を体験すると共にそれに適応する(異文化間コミュニケーション)スキル(太田、2006、p.2)」を学ぶプログラムとして構築され、派遣留学を含めた長期留学への布石として位置づけられていたことがわかる。しかし、これ以降、毎年度短期海外研修の報告書の作成と学生による研修満足度調査の集計・分析は行ってきたが、「国境をまたぐ能力」の育成という本研修開始当初の目的が達成されているかをより具体的に測ってきたことはなく、また長期派遣やその他の短期海外研修につながっていることも示されてきたことはなかった(秋庭、2010)。

「国境をまたぐ能力」を、2005年度から2010年度までに出版された本短期海外研修報告書(一橋大学、2006、2007、2008、2009、2010)、2010年度の本研修シラバス、研修校に提出した研修の目的²から検証すると以下の要素が挙げられる:

- 多文化社会における多様性を学習する
- 多文化社会における柔軟性を身につける
- コミュニケーション能力を習得する
- 論理的思考を身につける
- 自主性・自信を身につける

これらの習得を目指した研修プログラムを、多民族社会であるオーストラリアで実践するとはどのような意味があるのか。ホームステイや留学生の多いキャンパスで研修を行うことで、学生は「いくつもの異文化衝突を体験しつつ、…そのショックや衝突を肯定的にとらえる能力をしだいに磨いていき、文化差から学ぶ術を身につけていく(服部、2006、p.3)」ことこそが、国境をまたぐ能力であると本研修報告書で指摘されている。国境をまたぐ能力の要素は、昨今よく言われるグローバル人材³ともその素養が類似している。

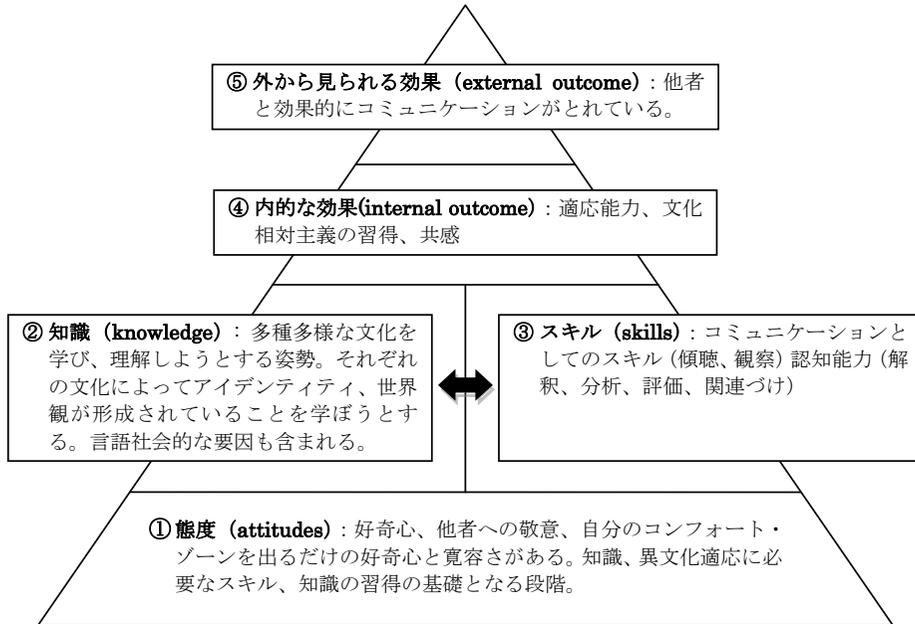
そこで、本稿では、上に掲げた短期海外研修の趣旨・目的が、学生の学習成果として現れているのかどうかを測るため、異文化適応能力モデル(Intercultural Competence Framework)を使って分析を行った。Deardorff(2006)は、異文化適応能力の習得が、段階を追って態度、知識、スキルと発達し、最終的には、内面的、外面的な異文化適応能力に至るモデルを提唱している:

² 2010年12月に研修校担当者と、本研修の目的と趣旨についての説明文を電子メールでやり取りしたときの内容より。

³ グローバル人材は①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティと定義づけられている(グローバル人材育成推進会議、2011)。

「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の
 学習成果：オーストラリア研修の事例より

図 2：異文化適応能力のピラミッド・モデル



参考：Deardorff (2006)

本稿では、以上の異文化適応能力モデルのうち、①態度、②知識、③スキル、の3段階から、学生の学習成果を見ていく。④と⑤については、異文化との接触を経て結果的に得られる効果であり、より長期的なフォローアップも必要となり、本稿では取り上げない。

Deardorff (2006) のモデルの①から③までの異文化適応能力モデルの定義より、上述した「国境をまたぐ能力」として過去の資料から抽出された5つの要素を大別すると、以下のように分類される：

表 2 異文化適応能力モデルからみた「国境をまたぐ能力」

	「国境をまたぐ能力」の5つの要素
①態度	多文化社会における柔軟性を身につける、自主性・自信を身につける
②知識	多文化社会における多様性を学習する
③スキル	コミュニケーション能力を習得する、論理的思考を身につける

この分類を参考に、本稿の目的である「国境をまたぐ能力」が習得されているかどうかを分析していく。

異文化適応能力というカテゴリーではないが、短期海外研修の趣旨・目的が達成されているかを見る指標として、今後の留学計画・キャリアにどのように影響を与えたかについても、分析項目として付け加えた。

4. 調査結果と分析

先にも述べたように、本稿では、事例となる短期海外研修の趣旨・目的が達成されているかを実証的に検証するため、学生のリフレクション・ペーパーを中心に、Deardorff(2006)が提唱する異文化適応能力モデルの3つのカテゴリーに沿って、その成果事例を抽出した。また、これとは別に、研修の学生への将来へのインパクトを探るため、4番目のカテゴリーとして、キャリアパスと今後の抱負を付け加えた。

4.1 態度の習得

①柔軟性を身につける

柔軟性とは、他者に興味を示し、自分とは違う価値観に心を開いて理解しようとする姿勢・価値観ともいえる。4週間の研修をホストファミリーと過ごすため、学生たちは様々な驚きとショックに直面しながらも、彼らの文化に興味を示し、様々な価値観を吸収しているのがうかがえる。ホストファミリーも様々な民族的・文化的背景を持っているため、研修に参加した学生たちは、彼らとの日常で日本とは違う側面を観察している：

ホストマザーとは、大学のこと、日本のこと、宗教のこと、家族のことなど本当に色々な話をしました。…ホストファミリーとの会話を通して感じたのは、ホストファミリーをはじめオーストラリアでは、異文化を認め受容する姿勢がつよくあるということです。日本では、自分と違ったり、少数派のものを軽蔑とは言わないまでも、違った目で見たり否定したりすることがしばしばあるように感じるのですが、オーストラリアでは自分とは違うものや異文化を決して批判や否定することなく尊重しているように思えました(女子A・1年)。

また、集団主義といわれる日本からオーストラリアに行ったことで、ホストファミリーだけではなく、日々の人々との出会いから、日本社会で感じていた「自分」と「他者」との距離感についても考察している：

人々が自信を持って英語を話すことも、快く私の英語に耳を傾けることも、オーストラリアに住む人々が、外見や宗教など、互いの違いを当たり前のように受け止めているからこそ可能なのだと思う。そのように考えた時、私が英語力の乏しさを心配し、英語を使うときに必要以上に構えてしまっていたのは、私が「日本人」と「日本人以外の人」というように、気付かないうちに人を区別してしまっていたからなのではないかと感じた。…今回の体験を通じ、どんなに違いがあっても相手は同じ人間なのだという事、そして、互いの違いは尊いものなのだという基本的なことを、身をもって実感することができた(女子B・1年)。

「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の
学習成果：オーストラリア研修の事例より

違いを受け入れるという柔軟性を学ぶことによって、この学生は、発音にこだわることなく、コミュニケーションの道具として英語で話すことを楽しめるようになったと述べている。ある男子学生は、この研修ほど自分と他人を認識する機会はなかったと綴っている：

誰もが「他人は他人、自分は自分。他人に『自分』は求めない」ことを認識していて、集団に同一性を求めない。…そんな土壌が他人を受け入れやすくし、個人の対人関係もうまくいかせている。…自身を曲げない上で、『他人をうけいれる』こと。その重要性は当たり前だが、この1か月を経るまで忘れていたことだった（男子A・1年）。

自分と他人の違いを受け入れながらも、時にはほかの人々のために尽くす。このような寛容な態度を、今回の研修期間中に起きた東日本大震災によって、学生たちは、より身近に感じていたようだ。ホストファミリーが滞在期間の延長を申し出てくれたり、悩みを聞いてくれたと学生のレポートには多く書かれていた。お店に入って、知らない人が心配して、日本の家族の安否を聞かれた学生もいた。ある学生は、他者との関わりという点で、この震災後の対応を以下に述べている：

私がホストファミリーと教会に行って一番驚いたのは、みんな、他人のために祈ることをいとわない、というところだ。むしろ、祈りたがるという印象を受けた。…彼らは私のために長い間祈ってくれた。純粹に、とてもうれしかった。地震が起きた時も、日本のことを真っ先に考え、日本のことを祈ってくれたのは、日本人よりも先に彼らであった（女子C・1年）

②自主性・自信を身につける

日本で大学生として主体性を身につけていると思っても、外国でホストファミリーと4週間過ごし、8時から始まる授業を履修し、充実した生活を送るためには、時間を有効に活用して行動することを意識せざるを得ないことが、学生のレポートからわかる。

ある学生は、家族、生活、短期海外研修の参加動機、専門分野など、普段あまり日本語でも表現する機会をもたず、曖昧にしていたことをホストマザーとの会話から気づかされ、最初は落ち込みながらも前向きに捉えている：

「～について教えて？」などとよく聞かれたのだが、微笑んで曖昧に頷いていたりなどしていたら、「そういうのはよくない！…きちんとあなたの考えを私に言ってくれないと、私もどうしていいかわからない」と言われた。…マザーがはっきり言ってくれたおかげで、自分の考えの甘さを認識できたと思うので、今ではとても感謝している（女子D・1年）。

このホストマザーの一言で、彼女は自分の意見や主体性をもつことが人と仲良くなれる、コミュニケーションのとれる最善の方法であると感じたと述べている。また、主体的に動き、学ぶことの面白さ、自分の考えを伝えようとする姿勢の大切さについて言及している学生もいる。

主体性と関連して、ある学生は、研修参加動機に触れ、海外に行く際にも、何か物事を進める際にも、その目的を明確にして臨む大切さを学んだと述べている：

海外に行く際には、その目的を明確にしていくべき、ということである。…英語力の向上、オーストラリアについて学ぶ、メルボルンを楽しむ、など。その目的意識によって、滞在中の過ごし方も変わってくる。今後も機会があれば、自分は何をしに行くのか、何を学びたいのかなど明確な目的意識をもって、その機会を最大限に活かそうと思う(男子A・4年)

このように主体性をもって活動して試行錯誤をしていくなかで、学生たちは自信をつけて、現地の人と関わろうとしている姿がリフレクション・ペーパーから見えてくる。

4.2 知識の習得

①多文化社会における多様性を学習する

上述の分析方法に従って学生のレポートから知識に関する項目を抽出していくと、3つのテーマに大きく分けられる。

一番多く取り上げられていたのは、多文化社会のオーストラリアにおける英語に対する認識の変化とコミュニケーション・ツールとしての英語の重要性である：

- 約200か国からの移民が住んでいるオーストラリアに、日本の狭さと同時に、意思疎通を図る手段としての英語の重要性を感じた(男子B・1年)
- 英語は「受験勉強のために仕方なくやる」受験科目ではなく、生きた言語なのだということを感じた(女子C・1年)
- 英語は学ぶものではなく、コミュニケーション・ツールの1つであり、自分や英語を話す人をつないでくれる架け橋のような素敵なものである(女子E・1年)
- 印象的だったのは、英語の発音の多様さと、私のつたない英語を嫌な顔をせず聞いてくれた、人々の快さだった。…発音が様々でも皆堂々と英語を話していた(女子B・1年)。

研修の参加動機に関するアンケートでは、18名中17名が語学力(英語力)の向上を研修参加の理由としてもっとも多く挙げていたが(複数回答可)⁴、現地に行ってみて、コミュ

⁴ 参加動機として多かった回答は、大学主催で信頼できるため(14名)、短期で参加できるため(9名)、であった。

「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の
学習成果：オーストラリア研修の事例より

ニケーションの手段としての英語の重要性を研修期間中に体感できたというのが興味深い。実際には、帰国後のアンケートで、研修前と研修後に目標としていた英語のコミュニケーション力の能力がどれぐらい達成できたのかという問いに対して、18名中3名が100%、12名が80%、3名が50%達成できたとコミュニケーション力の向上を自己評価している⁵。

2つ目は、授業と学習スタイル、大学生観の違いである。現地の学校での授業見学、現地の大学生との交流から、参加学生は様々な刺激を受けているのがわかる：

- 生徒参加型の授業で、自らが考え発表する機会が多く、「しっかりと自分の意見を持ち、他人と意見を交換したり発表したりできる」という国民性が形成されている（男子C・1年）
- 同じ分野を学んでいる学生は、学年も同じでしたが、学んでいる内容に驚きました。僕よりも知識量が豊富で…予習が大変だと言っていましたが、毎日の勉強が充実しているようでした。（男子A・2年）
- ツアーで出会ったドイツ人とデンマーク人の19歳の青年は、高校卒業後、すぐに大学に願書は出さず、1年間を海外でアルバイトをしながら、英語力を身につけながら、いろいろな文化を学び、大学でこの経験を生かしたいと教えてくれた。…学びの姿勢に驚くとともに、…「世界に目を向ける」ことの重要性を学んだ（男子D・1年）

3つ目は、外国に住み、様々な人たちと出会うことによって見えてくる自国の文化や自分の認識に対する再評価である。ある学生は、高校訪問の際、全員が中国からの留学生というクラスでの出来事を以下のように述べている：

日本のアニメや文化についてよく知っていて驚かされました。しかし、日本のことや普段の生活に関する質問が多い中で、「中国について知っていますか？」という質問をされたとき、なかなかうまく答えられず、自分は隣国のことを思っている以上に知らないのだ、と感じてしまいました（男子B・2年）

別の学生は、以前同じホストファミリー先に滞在し、現地に暮らしている日本人と話をするなかで、外国からみた日本について考察している：

多くの文化や人種が入り混じった世界に身を置くことで、日本人という凝り固まった思考を捨て去ることができ、他の文化に対して寛容になることができると同時に、様々な視点

⁵ 客観的な英語力の指標として、研修前後に外部の英語能力試験を受験し、その得点の相関を検証する予定であったが、震災のため、帰国直後に予定していた同試験が大幅に延期となり、不可能となった。

から自国の文化を見つめなおすことで、自国に対する理解も深まるのではないか(女子 F・1年)

4.3 異文化適応能力：スキルの習得

①コミュニケーション能力を習得する

Deardorff(2006)が掲げるコミュニケーションのスキルとして、具体的には傾聴、観察を通じて、内的・外的効果が結果的に得られると述べているが、研修に参加した学生たちは、自分で意見を持って発言し、他者とコミュニケーションをとるという発信・発言というスキルを実践することで、コミュニケーション能力を積極的に学ぼうとしている姿勢がうかがえる：

この研修の経験を活かす方法はいくらでもあると思う。むしろすでに生かされているように感じている。基本的に物事に消極的だった自分が少しでも積極的に自身の意見を発信しようとしている。人と接することを億劫に思ったり、避けたりしなくなった。自分の行動や自信をもてるようになった(女子 E・1年)。

同様に、別の学生はホストファミリーとの4週間で学んだことを以下に述べている：

色々な問題について「あなたはどう思う？」と聞かれたので、いやでも自分の意見を英語にしなければならず、最初のうちは正直苦痛でしたが、2週目に入ることには、自分でもなんとか言いたいことを伝えようとする姿勢が身についてきて、英語がだんだん上達していきました(女子 G・1年)。

②論理的思考を身につける

ホストファミリー、教師、現地学生との会話、現地の学校訪問で衝撃を受けた点として、ある学生は、「オーストラリア人は『怖いぐらいに』論理的思考をおこなっている(男子 C・1年)」と、以下の事例を挙げている：

「あなたは今私に対して怒っている、そうでしょうか？」という日本人が聞きにくい質問や、「今日の夕食は、好き？嫌い？」という物事に白黒をつけたがる質問をズバツとしてくる。…ホストマザーに聞いたところ、「あなたが気を悪くしていれば、解決しなければいけない。おいしくない食事は食べる必要はないし、二度と私はそれをあなたに作らない。これはお互いの幸せのためよ」と答えられた。(男性 C・1年)。

このように、今まで日本国内で曖昧な返事をすることに慣れていた学生たちにとっては、

「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の
学習成果：オーストラリア研修の事例より

ホストファミリーとの日常的なやり取りのなかで直接的な質問が多く、日本人的思考回路と曖昧な返事は通用しないことがあることを学んだという学生の意見が多かった。

また、論理的思考と関連して、オーストラリアでは、論理的思考に基づいてユーモアと知性が組み込まれており、会話が成立していることを学んだと指摘する学生もいた：

オーストラリア人は卒業式や大事なプレゼンテーションの場面でも平気でジョークを織り込んでくれる。そして、得てしてそのことが聴衆の心をつかみ、逆に集中させるのだ。…実際に海外に生活してみると、論理的思考が主流だからこそ、ユーモアが生きてくるのだということにひしひしと気がついた。…ただ、ユーモア力の醸成に関しては、私はユーモアを受け入れる聴衆の風土があることが最も重要であると考えている（男子 E・1年）

4 週間で論理的思考を身につけるまでには至らないかもしれないが、日本との違いに気づき、それを理解しようとする姿は、すでに論理的思考を学んでいる証拠であるともいえる。

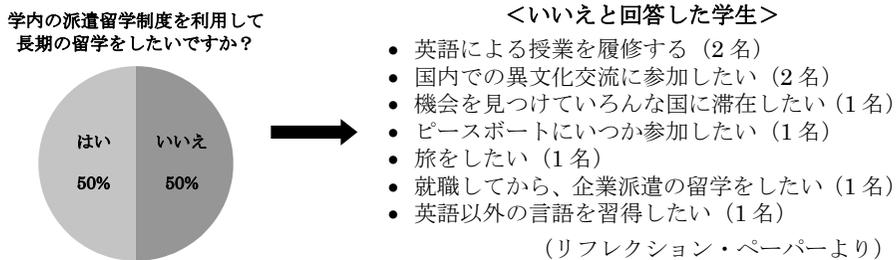
4.4 キャリアパス・今後の抱負

この項目では、研修直前・直後に実施したアンケートと研修後に提出されたレフレクション・ペーパーから、短期海外研修が学生のキャリアや長期留学にどのような影響を与えたかを分析する。

研修直前のアンケートでは、18名のうち半分の9名が、在学中に派遣留学制度を利用して長期で留学（半年ないし1年）をしたいと回答した。その他9名は、同制度による留学を考えていないと答えている。興味深いことに、長期の留学を予定していない学生9名のうち8名が、今後の展望として「4年で卒業して就職」と自由記述欄で答えている。

同じアンケートを帰国後に再配布し、自分のなかで長期留学の意思、希望大学名が変わった場合には、それを書き加えるように指示をしたところ、研修前に、制度を利用しての長期留学の意思はないと答えた9名は、研修後もその意思は変わることはなかった。しかし、この9名のレフレクション・レポートを分析すると、短期海外研修後には長期留学ではなく、それぞれに短期海外研修で得た経験を生かしたいと考えているのがわかる（図3）。

図3：学内制度を利用した長期留学に対する回答



また、長期留学を視野に入れていたと応えた学生9名のうち、2名が2012年度派遣留学制度に合格している。その他6名のうち、4名については、2013年度の派遣留学制度か学外の団体による長期留学を視野に入れて、TOEFLなどの試験を受験している⁶。

5. まとめと今後の課題

本稿では、「国境をまたぐ能力」の育成を目的として始まった短期海外研修が、その目的に見合った学習成果を出しているのかを検証するため、学生の研修後のリフレクション・ペーパーを中心に分析を行った。また、本研修が派遣留学等の長期留学につながっているのかについても検証するため、長期留学の予定の有無についても、研修直前・直後アンケートで質問を行った。

「国境をまたぐ能力」を過去の研修関連の資料からキーワードを5つ抽出し、Dearthoff (2006) の異文化適応能力モデルに沿って、学生のリフレクション・ペーパーを分析した結果、学生たちの「国境をまたぐ能力」、つまり、①多文化社会における多様性を学習する、②多文化社会における柔軟性を身につける、③コミュニケーション能力を習得する、④論理的思考を身につける、⑤自主性・自信を身につける、という能力が、4週間という短期でも着実に育成されていることが明らかになった。学生のペーパーから分かるのは、学生たちの感性はもちろんながら、本研修がオーストラリアの多文化が体感できるように、授業以外でも、現地学生との交流会、現地での聞き取り調査の発表とレポート提出、現地の学校訪問が盛り込まれていること、ホームステイといった現地の人々との交流が意図的に組み込まれていることで、様々な人との出会いから、体験的に学んでいるという点が大きい。

研修参加者18名のうち、学内の制度による長期留学を予定していないと回答した学生は9名いたが、帰国後のリフレクション・ペーパーから、学内制度による長期留学は予定してなくても、旅行や・国内での活動によって、いろいろな人々と交流したいという考えがレポートから浮かび上がった。また、長期留学を考えている学生については、短期海外研修を終えてから1年後も長期留学に向けて準備している場合もあり、研修担当者なら

⁶ 2011年度の留学生・海外留学相談室での筆者の相談記録より。

「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の
学習成果：オーストラリア研修の事例より

びに海外留学相談担当者が長期的にサポートすることも、学生の派遣を推進する上でも必要であることが分かった。

本稿では短期海外研修の事例研究として質的手法を中心に分析を試みたが、今後は「国境をまたぐ能力」をより具体的に測定するため、指標やツールを活用して、学生の学びの過程を量的視点からも分析し、グローバル人材の育成と絡めて異文化適応能力と短期海外研修の学習成果の関連性をより可視化できるように検証していくことが今後の課題である。

参考文献

- Ash, S.L. & Clayton, P.H. (2004) The articulated learning: An approach to guided reflection and assessment. *Innovative Higher Education*. 29(2) pp.137-154
- Brooking, D. M. (2010). Experiential learning in an international context: College student experiences in short-term international service-learning programs. A dissertation submitted to the University of Alabama. Retrieved April 16, 2012 from http://acumen.lib.ua.edu/content/u0015/0000001/0000482/u0015_0000001_0000482.pdf
- Chieffo, L. & Griffiths, L. (2004). Large-scale assessment of student attitudes after a short-term study abroad program. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 165-177.
- Chieffo, L. & Griffiths, L. (2009) Here to stay: Increasing Acceptance of Short-Term Study Abroad Programs. In Lewin, R. (ed.) *The Handbook of Practice and Research in Study Abroad*. Routledge. pp.365-380.
- Deardorff, D. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of Studies in International Education*. 10 (3). pp.241-266.
- Deardorff, D. (2009) Understanding the challenges of assessing global citizenship. In Lewin, R. (ed.) *The Handbook of Practice and Research in Study Abroad*. Routledge. pp.346-364.
- Donnelly-Smith, L. (2009) Global learning through short-term study abroad
Retrieved April 4, 2012, from http://www.aacu.org/peerreview/pr-fa09/documents/PR-FA09_DonnellySmith.pdf
- Institute of International Education (2011). *Open Doors 2011*.
- Paige, R. M., Fry, G. W., Stallman, E., Josic, J., and J.-E. Jon. (2009). Study abroad for global engagement: Results that inform research and policy agendas. Presented at the Forum on Education Abroad Conference in Portland, OR.
- 秋庭裕子 (2010) 『短期海外研修 (モナシュ研修) の教育評価と今後の課題について』 *Agora 20* 号、一橋大学・大学教育開発研究センター p.3
- 太田浩 (2006) 『短期海外研修 (パイロット・プロジェクト) 実施の経緯』「一橋大学短期海外

- 研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」一橋大学 p.2
- 工藤和宏 (2011) 『短期海外研修プログラムの教育的効果とは－再考と提言－』『ウェブマガジン「留学交流」』2011年12月号
- <http://www.jasso.go.jp/about/documents/kazuhirokudo.pdf> (2012年3月20日閲覧)
- グローバル人材育成推進会議 (2011) 「グローバル人材育成会議 中間まとめ
- http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/data/junbi_kaigou/H24junbi_san01.pdf
(2012年4月12日閲覧)
- 日本学生支援機構 (2011) 「平成21年度 協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」
- http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/short_term09.pdf
(2012年4月12日閲覧)
- 服部誠 (2006) 『オーストラリアでの海外研修に寄せて』「一橋大学短期海外研修報告書モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」一橋大学 p.3
- 一橋大学 (2006) 「一橋大学短期海外研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」
- 一橋大学 (2007) 「一橋大学短期海外研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」
- 一橋大学 (2008) 「一橋大学短期海外研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」
- 一橋大学 (2009) 「2008年度一橋大学短期海外研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」
- 一橋大学 (2010) 「2009年度一橋大学短期海外研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」
- 一橋大学 (2011) 「2010年度一橋大学短期海外研修報告書 モナシュ大学：オーストラリア・メルボルン」

(あきば ひろこ 商学研究科講師)